

定本 小林多喜二全集 第五卷

1968年3月30日 初版 ©

定価 420円

著者 小林多喜二

編者 小林多喜二全集編纂委員会

発行者 松宮龍起

東京都千代田区富士見2の13の14
発行所 株式会社 新日本出版社
電話 東京(262)4732
振替番号 東京13681

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

〔鎌倉印刷納〕

小林多喜二全集

第五卷

新日本出版社

編纂委員（五十音順）

江口 渙

蔵原 惟人

壺井 繁治

手塚 英孝

宮本 顕治

校訂解題

手塚 英孝

装丁

栃折久美子

暴風警戒報

——困難な下半期——

一

その港の第二期築港埋立計画が、「政争」の具にされた。波止場一帯に要りもしない「運河」が楕形にほられた。

運河の水は腐っていた。煤煙で黒く濁り、蓄膿症の鼻汁のように腐っていた。回漕店、汽船会社、仲仕溜場、連絡倉庫、石炭現場、木材積卸場が、口を並べて、海風の交った運河の臭いを吸い込んだ。舳が平べったい背に棒鱈、塩鱈、メリケン粉、カントン袋を規則正しく積み重ねて、岸壁に身体を並べている。——港からは汽笛が響いた。銅鑼がなった。起重機の腕が廻わると、チエンがガラ／＼ひびいた。高架棧橋の鉄口から、何十尺下の汽船のダンブルに、石炭の滑り落ちる凄い音が海を伝って直接に響いてきた。税関の構内には暴風警戒の旗が、子供の掌のように高く翻っている。

こゝは市の「生産面」だ。——市のこの部分だけが劇しく何時でも、ド、キを打っている。

市は海迄裾をひいている山の斜面を、その高みと低みを充たして、階段に這い上っている。——海岸通りの一つ上の通りには、大会社、大問屋、一流銀行、大ビルディングが、アスファルトの上に高く交錯した斜線を切っている。——その上の通りは、汚い労働者が決して一度も歩いたことのない明るい、まばゆい遊歩街だ。——その上が公園だ。街がそこから一眼に見える。——その上の通りは、樹木の蔭の静かな「山の手」だ。

だが、市の両端は、泥濘と、便臭と、形のくずれた三十軒長屋と、淫売屋と、積取人夫の安宿と、煤煙と……真ッ暗だ。

「労働者」がいるのだ。

「岩城ビル」はこの暗い「臭い街」の入口に、その歪んだ大きな図体を邪魔ッ臭くのさばらせて、蹲んでいるのだ。——「岩城ビル」。皆そう云った。だが、

「ビル」でなくて、「アパート」なのだ。「アパート」！然し、そんなハイカラな言葉で呼ぼうものなら、このとてつもなく大きな「塵芥箱」は、柄になく、テ、テ、しまうだろう。——汚い雑多な「世帯」が南京虫のようにゴミ／＼とさ／＼り込んでいるどうにもならない「塵芥箱」なのだ。

野口と島田は「岩城ビル」にいた。——二人とも「H・S製鋼所」に通っている。

二

だるそうな足が、きしむ階段を一つ、一つゆっくり上ってきた。

「ソーニャ」だ。——野口達の筋向いにいる会社員の寺田が、その若い、ホッそりした女をそういつている。三階の隅っこに「姉さん」と二人で、別々に室を持っている。タキ子がその名だ。

「いる？」

寺田の室の前に立ち止った。軽く息をハズませている。室は階段の上り口すぐだ。

タキ子が中に入ると、横顔を向けて、うつむいたまま坐った。眼が疲れを見せている。

「お客さんが帰ったネ。——随分長くいたんだな。」
「……………」

「タキちゃんがお客を連れてきたり、送って行ったりしているのを、この部屋でじいと聞いていると——こう、やっぱり胸んとこが変になるな……………」

「私だってそのこと考えてるわ。どんなに……………」

「ソーニャ」はチョコレートやドロップスの五つ六つ位ずつ混ったのを、クル／＼と紙に包んで置いて行く。——「ソーニャ」はその外にこういう事をする。寺田が「一週間」を読んでいる。(彼は左翼の芸術運動をやっていた。)何枚か繰って行くと、フト紙片が出てくるのだ。

一生懸命勉強して、

お偉い方になって下さい。

貴方の「ソーニャ」より
道夫さんへ。(キッスをしました。)

「道夫さんへ」という字が、そこだけ、インキが滲んでいた。

寺田が会社に行っている間に、ソツと入って来るらしかった。淋しいことがあると、寺田の室で何時迄も泣くのだ、といっている。同じ家において、タキ子は寺田に手紙を出した。ワザ／＼二三町離れたポストに入れに行ってくる。すると次の朝それが寺田に配達になった。——まだ十九になっていないのだ。

タキ子は立ち際に、帯の間から四ツ程に疊んだ紙を出した。

「忘れてた。——街角かどで号外を拾ってきたの。」

「田中内閣総辞職」号外は不揃いな大急ぎの字を並べていた。寺田は新鮮な活字の匂いを嗅いだ。

「ホオ——？ これは！」

寺田は声をあげた。

「野口と島田は知ってるかな。」

三

四つに折目のついた号外の皺が綺麗にのされて、その上に三つの頭が重なり合った。野口達の室だ。壁から「レーニン」がそれを見下している。

野口は首の短い、四角い顔をした旋盤工だった。打つても直ぐ響かない鈍感な男だ。島田はそういつている。むっつり屋で、眼がギロ／＼している。「岩城ビル」では、それで誰も野口を愛してはいない。だが、それはそれだけが理由の全部なのではない。野口は「シギシャ」だというのだ。父は奥地おくちで小作をやっている。

「打倒田中サーベル内閣」——二年もの間、野口達は闘ってきたのだ。めずらしく角な顔が形をくずした。

「だが、こいつァ分らなくなつたぞ。」——何時もの用心深い顔だ。

「ん？」

「待ってくれ。——分らないな。」

「大命降下は浜口だ。そうだとすれば、今度こそ少しはやりよくなるさ。」

「何故よ？」

野口はムツとした声を出した。

「田中内閣を散々やっつけてきた手前もあるからな。どうしたって多分に、自由主義的要素を持って登場してくるさ。そこをつかむのさ。——俺達の運動はそういう処を巧みにつかんで、決して差支えないんだ。」

「そうだよ。」不機嫌に、ブッキラ棒に、「然し、そこだよ、分らないのは——」

「……………」

又始まった！ 島田は、底の知れないこの憎々しさが、彼の短い首から出るのだと思った。

「知ってるだろうが——、英国で労働党が内閣を乗取ったって新聞に出たとき、工場で仲間が馬鹿に興奮

したのを。」

「ホ——。」

寺田が声をあげた。「英国のことでも、労働党のことが、そんなに北海道の職工達にも響くものかな！」

「俺達だって、見る！ 皆そう云ってた。一日仕事が出来ない位だ。その時お前は眼に涙をためて、その尻馬にのっかっていったんでないか！」

四

「円みのない頭だな、お前の頭ア。——あんな時でも厳密な考えを崩さずに、苦虫をつぶしてれってか？ そも／＼右翼社会民主主義者とは——ってか？」

「こいつ、誤魔化しやがる！」

労働者は、下手な高商出や大学出の銀行員、会社員などよりもこんな政治というものに対して、要求や関心を持っているんだ。そのことでは、この俺だって、お前に負けない位涙が出てきたんだぜ。だから、だか

らよ。尙更このヌエ、労働党が、労働者にヤ恐ろしい阿片だつて云うんだ。そいつを皆の前でドシ／＼やつて行かなければならない時、お前何してたか？——大したもんだ。労働者だつて大したもんだつて、オイ／＼……」

「まアいゝ、まアいゝ。ムキになる奴だな！——お前に負けて置くよ。」

「負けておくと帳消にされるもんか、こういう事は。——悪い癖だぞ。」

「で、浜口と労働党がどうかとでも云うのか？」
 かなわない、という風に島田は逃げを打った。

「仲々分るもんか。」

で、二人とも——島田も寺田もブツと吹き出してしまった。「何アんだい！」

煤けて、世界地図を描いている天井が、ミシ／＼なつた。重い「男」の足の下でなるミシ／＼だ。フト、寺田の顔が天井を見上げた。「ソーニャ」の室が丁度この真上になっているのだ。

「たゞ、俺達の周囲のどこを見たつて、いずれ近い中に第二の大規模の戦争が起るつてことが分つてゐるし、それにいくら弾圧を加えたつて、ます／＼左翼の運動が猛烈になつて行くことも分つてゐる。——その時にだ、この軍事内閣をこともあるうに、枢密院が何故辞職させたか、それが分らないんだよ。」

「野口は何時でもとんでもない処へ考えを持って行つてるんだな。」

「じゃ。——島田が口を入れた。「じゃ英国だつて同じ理窟でないかな。こんな世界に世界の情勢が逼迫してるとき、何故マグドナルドのような、それがたとい右翼社会民主主義者であろうと、ともかくも労働党と名のつくものに内閣を与えたかつてことがな……」

「ん、どうも——そうなるんだ。」

野口は窓際に腰をかけて、バットを深く吸い込んだ。それからフウーとはいた。——下に見える「明るい街」と「臭い街」の交叉点は新鮮で活々と渦をまき返している。もう夜だ。——こゝは、それでも明る

い。触角を振り立て、ひどいカーブを曲がってくる電車がガチャン／＼としゃっくりしながら、ポールに稲妻を閃めかした。幾台もの自動車のヘッド・ライトが交錯した。労働者のたくましい肩が、港の人夫の袷天が、光った。そして消えた。

と、窓に在る野口の眼は、道と同じ幅だけの織物のように流れている雑踏の中から、さどく、一つの、小さいたった一つの縞目の瘤をつかんだ。それはそれとすぐ分る外形をして、雑踏から歩度を外した特別な歩き方をして在る。少し行くと、今度は戻ってくる。それは何かを探がして在る。——「ソーニャ」と一緒に在る玉枝だ。

五

四つの足だけが舗道の上でからんだ。雑多な足がそこではぐまれ、澱み、そして両側へ流れた。男の厚い肩胛骨がドシンと来た。小鼻のふくらんだ酒臭い顔が

玉枝の眼一杯にきた。

「三円。」

「ウ、いゝ。」

玉枝は先きに立って歩き出した。これで、まずいゝ。女はお客をつれて「岩城ビル」の階段を上った。すゝめのように、一枚々々のり返っている床板が足の下できしんだ。一段々々上った。——一階——二階。女は胸を張って、冷たい顔を真直ぐにして、上った。両側の室が下へ、下へ移動した。——三階。薄暗い光は、二人の歪んだ影を壁に大きく、色々とうつした。

この国の労働者運動が年と共に高まり行く大衆の圧力と、ようやく大衆化してきたプロレタリアの党の力によって、官許政党の運動範囲が見る／＼その範囲を越えて行ったとき、支配階級は斧を振るった。——その「三・一五事件」で入った女の同志のことを、野口が玉枝に話した。

「社会主義の女なら、日本人民として犬畜生よりも

劣るんだ。犬畜生なら、何をしたらってかまうことがないだろう。」

拷問係のスパイが抵抗力のなくなつたその女の同志の猿又を引き破つて、凌辱してしまつたのだ。――

「口惜しいか、口惜しくはないだろう。――口惜しいと思つたら、人間並だ。」――そう嘲笑つた。

「そのことが、中にいる同志に分つたのだ。君は男泣きつてもものを知つてるか。――皆男泣きに泣いたのだ。その時、女の同志は、然しローザのように清い瞳を輝かして、叫んだ。

「同志の皆さん、心配して下さるな、我々は必ず勝つのである。――然し、その時までには！」

それを法廷で云つたのだ。

これは、ホラそのレーニンの言葉だ。――然し、その時までには！……分る？ この中にこそ無限の氣持が含まれているではないか。」

興奮はめずらしく野口を吃らせた。だが、それより「同性」の玉枝は、下唇に一つ、一つ齒形を刻み込ん

でいた。冷たい石のように、女の顔がこわばつた。

「じゃ、私だつてクヨクヨすることは止めよう。」

女はしばらくして、ハッキリ云つた。

自分は性交力を売る労働者だ、彼女はそれから、そう考えた。この意識の発見は、こういう女が必ず持つ古い惨めさを、玉枝から爪先きの切れた足袋のように捨てさせた。

玉枝は「復活」位は読んでいる。――タキちゃんを「ソーニャ」なんて名前をつけて呼ぶ寺田さんなら「ネフリードフ」どころだろう。「甘い、甘い。」と云つた。

「あんな小説をかく人らしくなく、寺田さんは女にはセンチメンタルね。」

で、今「一時間三円」の賃労働に雇傭された女工のように、玉枝は冷たい顔をしたまゝ、自分の室の障子を開けた。

六

「三月党员帰る！」

障子の骨がゆがんで、ギシ／＼抵抗した。拍子に、力一杯開くと、島田の噪いだ顔が飛び込んだ。

「三月党员？ 何んだ、それ？」

「我が三・一五の党员さ。——二人無罪で帰ってきたんだ。」

野口は頁に鉛筆をはさんで、本を伏せた。レーニンの「労働組合論」を読んでいたのだ。

「そうか、よかった！」

急務は「四・一六」の打撃の回復だった。

——「三・一五」以後、日本の無産運動は正しい方向をつかんだ。日本の運動も初めて世界的規模で考え得られるところまで行った。——「プロレタリアの党は一つしか、共産党しかあり得ないこと。」「合法的活

動は強固な地下的組織の上に結合されてのみ、初めて力あること。」「我々は無産大衆とは工場プロレタリアを指すと厳格に規定する。工場は城塞だ。街頭の浮き上った、弾圧に一番弱い、しかも一見華々しい組織を清算すること。そして清算した。——然し「あせった」発見の大きさには、荷が勝ち過ぎたのだ。地味な、底に沈んだ地下建築が、それで「素人細工」になった。で「四・一六」はそれを根こそぎにしてしまったのだ。二度「血」を流した。

——急務は、だから「四・一六」の打撃の回復なのだ。

「さ、いよいよ共産主義の学校を建てろぞ。基礎工事からだ。三月党员も帰ったし。」

島田にそう云われて、向いの寺田は分らない顔を向けた。

「オイ／＼、気でも、狂ったのか。」

「狂うもんか、労働組合は共産主義の学校だって、

レーニンが云っている、レーニンが。」

そして、ワハ、ハ、ハ、と笑い出した。

「畜生！」

寺田も吹き出した。島田の肩をグイグイついて「大げさな云い方をすんなよ。」

「忙がしくなる。君も大馬力をかけてくれ。人が一番足りない時だ。」

前から寺田は組合で「ニュース」や「ポスター」を書いていた。小説も作る。だが、画の方がうまかった。

彼等は毎晩遅く帰った。「組合創立準備会」が持たれたのだ。クタ／＼になつていたので、室に入ると、いきなり手足をのばして、仰向けにひっくりかえつた。

全国的に、強固な「左翼組合」の再建が叫ばれた。

——それは党と大衆の結合点であり、党の大衆化はそこに具体的な貯水池を見出さなければならなかつたからだ。離れていては駄目だ。孤立した党、そんなこと

は有り得ないからだ。

この市の闘争もその線に沿つたのだ。

七

一九二八年の暮「新党準備会」が、合法政党としての結党を放棄して、プロレタリアの党によって指導される「闘争団」として鋭角的に方向を転換した。だが、今迄日本の運動は真実に革命的な組織運動を、その明確な方法に於ても、実践に於ても具体的には知らず見過ごして来たのだ。——で、その急角度の「曲角」で、日本の運動は遠心力からヨロメいてしまった。——あわて、ふためいて（！）革命的な分子は地下へ沈んで行った。ハラ／＼する危い過渡期だった。——野口は今になって、「四・一六」を見送つてみて、それがマザマザと分る。

——確かに沈んで行った。然し「華かな」浮び癖と、沈んで行って、さてその底で、しっかりした「岩」を

オイそれとつかむ事が出来なかったのだ。で、ひよいひよいと水の面へ頭を出してしまふ事をしてしまったのだ。鉄砲を水面に向けて、ジイトにらんでいる「彼奴等」に、それが見付からずにはいない。

この市が（他の市もそうであるように）そうだった。——看板を出している「事務所」が役に立たなくなる。「彼奴等」の眼から秘密に移動して、幾つも持たなければならなくなった。そのことは、それ等の分子を組合の大衆から「離れた形」にする。工場は「一カ月に一人」しか動かない。——で、幹部だけが「浮き上った。」そして何時迄も逃げ廻っている。コソ／＼何かをやっているんだ、彼奴等にはすぐそう見える。しかも「労農同盟」は「党」によって指導されていると、日本語で明言してはいないか。——万事がおあつらい向きだ。——「四・一六」は来なければならなかったのだ。この市の指導者は七羽完全に「ねらい打ち」されてしまった。（彼奴等の云い方に従えば。）

大衆がなかったから弾圧にもろかった。

大衆の中に「沈入」していなかった。

「繰りかえすな！」

で、大衆の実体を持つことだ。

サ、今度こそだ。

この市の底もムク／＼とふくれ出すぞ。それが、見る、何時かハネ返すから！ 遅い帰り、よく興奮が野口を捉えた。

八

黒い布を張ったように、昼でもその隅に闇が濃んでいる。

急に鋭い男と女の罵声が、その二階の浜人足の室から殴ぐり合うように起った。ゆがんだボロ箱の「岩城ビル」は、と、一階も二階も三階もユキ／＼と直接に、その身体の打ち合いを伝えた。「岩城ビル」は大きな図体を「イヤ／＼」した。

「さ、殺せ！ 殺せ——え！ 殺せッ!!」

キリ／＼と張り上げる声が、障子をピーン、ピーンと、その度にならした。女房だ。

息はずませた男の声が折り重なって、丸太棒のようにならに打つつかる。どの室からも顔がのぞいた。

「又始まった。」

障子の腹がグッ、グッと膨んで——と、腰を払って、段ぐり合っている二人が障子に乗ったまま廊下へ転げ出た。皆廊下を馳けた。焼酎の空瓶が廊下を転んで、階段のきざみを一つ、一つ音を立て、落ちて行った。

雨が十日続いたのだ。そこへ浜口内閣が「金解禁」断行の第一歩として「緊縮政策」看板を表に持ち出した。港の仕事がガラリと減った。仕掛けていた仕事を取り止めになった。市の「心臓」は狭心症発作におち入ったのだ。——明かに寡頭金融資本家の利益に追隨する「金解禁」の政策は、労働階級に「火」の憤激を惹き起すだろう。それは、そして中小商工業者の惨めな没落と結びつく。——で、真綿が必要だったのだ。

「緊縮政策」の手だ。それは巧妙に、国家、財政の建直しという扮装にすりかえられた。

——浜人足は十日仕事にあぶれたのだ。しかも、その十日の間人足も、その女房も、二人の子供も仕事がないのに、凶々しく「飯だけは食っていた。」然しこれは本当でない。本当は食えなかったのだ。だが、食わなければならなかったのだ。でどうなるか。

夫婦喧嘩になった。夫は「働きのない馬鹿野郎」であり、女房は「生意気にも、口だけツベコベ云う女郎」だった。段ぐり合った。——だが、二人は喧嘩の相手を間違えていたのだ。

誰が本当の喧嘩の相手か、それは野口達が知っている。

ビルの人に仲に入られると、人夫はブイと外へ出て行った。女房は真青な顔をして、手拭で頭をしぼった。眼が変に上つっていた。子供が側から「オ母ちゃオ母ちゃ！」と纏いついてきても、うつろな顔をして払いもしなかった。——女房も市役所の道路普しんや